

ほ場見学者用の立札について

吉田美夫・北原操一・鶴 政夫

(九州農業試験場)

YOSHIDA, Y., KITAHARA, S. and TSURU, M.

The Bulletin-board Explaining Outlines of Field Experiments for Visitors.

わが国では、いわゆる実用的な研究は、いわゆる基礎的な研究よりもあたかも一段下かのように考えられている風潮がないでもない。このことは、古くローマ時代の貴族の考え方に由来していると思われるが、この考え方が、わが国の農業の発展を阻害する一つの要因になっていなければ幸いである。すべての研究をいわゆる学問的という一つの尺度で価値判断をするとところに問題があり、価値を測るには種々の物差しがあって然るべきである。ちなみに、米園農業の今日の発展の一因は、教育、研究および普及を同列に置き、かつ相互のコミュニケーションの良さであろう。

一つの試験研究は、当然その試験に固有の目的をもって行なわれているが、その試験に必要な労力、経費等は、試験目的を完遂するための過程においてその大部分が消費されている。そうすると、予算的に、人員的にそして時間的に限られた研究の環境条件下において、農業試験場やこれを構成する各部、各研究室の機能を最大限に発揮するためには、固有の研究目的を十二分に考えることはもとより必要であるが、その目的を完遂するための過程や手段も研究の対家となり得るし、それらに対する創意工夫も必要となる。

過程や手段には種々あるが、ここでは、研究論文、学会、講演会、会議などを通じてはよく分からないような極めて実際的な過程や手段を指している。例をあげると、土入れ機の利用がそれである。土入れ機は、育苗ほ場で麦を1 ha 栽培するとき、1作につき約36km (博多〜久留米駅の距離) 動いている計算になり、賃金節約のために非常に寄与している。この土入れ機を九州農試では早くより使用しているが、最近になってようやく他の2場所の麦の育成研

究室が入手した模様である。そして肝心な点は、この2場所の土入れ機に関する情報の入手経路が研究論文、学会、講演会、会議などを通じたものではなくて、個人的なつながりに依存しているということである。このように、実際の仕事に役に立つ情報の伝達上、一つの盲点を見いだし得るのである。

したがって、実際的には大いに役立っているのに一部の入しか知らなくて、今までの常識だと発表できないようなことをお互に発表し合って、試験研究遂行上の無だを省き得るならば、お互の試験研究の効率を高め得ることになる。そしてこのようなことのコミュニケーションの場にも九州農研協議会の研究発表会がなり得るならば、この研究発表会には新たな一つの機能が更に付加されることになる。

よって、ほんの一例として、研究を始めたばかりではあるが、ほ場見学者用の立札について述べることにする。

九州農試におけるほ場見学者用の立札のガラスは、子供のいたずらや自動車の車輪が小石を飛ばすことに基因して、従来、小麦作の一作中に約20枚破損していた。このことは予算的に無だでありかつ危険であるので、ソーダガラスを用いないで樹脂ガラスに直接マゼックインクで書き込む方法を用いて試験した。そして、供試した5種類のマゼックインクの中では、マゼック (R) 細書用、No. 500) が最もよく、これを用いると、少なくとも麦作期間中は立札の説明書きが消えないことが分かった。なお、樹脂ガラス1枚 (40cm×40cm×1mm) の価格は100円であり、同大のソーダガラス1枚の価格は150円である。また、樹脂ガラスはそれを家庭用洗剤などで洗うと書いた字は消えるので何回も使用し得る。